

一身にして二生を経る

牧師 山本 護

「一身にして二生を経る(文明論之概略)」。新しい年を迎え、福沢諭吉の言葉が思い浮かびました。諭吉の生涯年代「天保5年(1835)~明治34年(1901)」から、その言葉にある実感が想像できます。「門閥制度は親の敵(かたき)で御座る(福翁自伝)」と書くくらいですから、才気あふれる諭吉にとって下級藩士という家柄はよほど呪わしかったのでしょうか。身分や職業、居住地に制約がない明治になると、禄を失って途方に暮れる同輩を尻目に、諭吉は八面六臂の働きをします。

2025年になり、さして興味もなかった福沢諭吉の声がなぜ聞こえたのでしょうか。コンピュータサイエンスや生成AIなどによって急速に変化している社会の実相を、こんな田舎にあっても感じているからだと思います。今度は、江戸と明治の落差で「二生を経た」日本だけに限りません。今や世界各地において富裕と庶民の違いなく、労働や経済の仕組み、教育環境や諸々の価値観が、静かに、底の方から大きく変わり始めています。



「一身にして二生を経る」。この言葉をわざと誤読して、歴史という時間軸ではなく、天と地という空間軸で考え直してみました。昨年の夏と秋、「越後妻有トリエンナーレ 2024 大地の芸術祭」へ小旅行をした。そこでくり返し観た、コンピュータ自動制御のマリオネット「上郷バンド=四季の歌(ニコラ・ダロ作)」。

個々人も、教会も、私たちの地上の営みは、天におられる神の「操り糸」で動いている。だけれども、それだけでしょいか。ダロ作の奇怪でカワイイ人形たちの演奏をしばらく眺めていると、地にあって生きる者のエモーション(感情)が天の神を動かしている、とも感じました。もしかすると、これまで祈りが幾度も「神に聞かれた」経験によって、この奇妙なミニチュアバンドを見ていたからかもしれません。

「わたしたちの本国は天にある。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っている(フィリピ 3:20)」。この地上に、この教会に、私たちそれぞれの場に、いつかマリオネットの糸をつたうようにキリストは来られるのでしょうか。

地上にある私たちは、本国である天とつながっています。ゆえに本国の天も、地上のエモーションで揺さぶられている(マタイ 11:12)。そもそも初めから、このままで「一身にして二生」である私たち。新しい年もまたそれを自覚しながら歩みます。Ω